

(電子メール施行)
農技第1687号
平成30年3月14日

関係機関長 様

兵庫県病害虫防除所長

平成29年度病害虫発生予報第8号を発表します。

平成29年度病害虫発生予報 第8号

向こう1か月の病害虫発生予想

作物名	病害虫名	発生予想	発生現況
春キャベツ	黒腐病	平年並	やや少
	菌核病	やや多	やや少
	アブラムシ類	やや少	少
	モンシロチュウ	やや少	少
タマネギ	べと病	やや多	やや少
	白色疫病	やや少	少
	細菌性病害	やや多	平年並
	ネギアザミウマ	やや少	やや少
春レタス	菌核病	やや多	平年並
	灰色かび病	やや多	やや多
	ハモグリバエ類	やや少	少
イチゴ	アブラムシ類	やや少	やや少
	ハダニ類	やや多	平年並

* 気象の概況

近畿地方 1か月予報

(3月10日から4月9日までの天候見通し)

平成30年3月8日
大阪管区气象台 発表

<特に注意を要する事項>

期間の前半は、気温がかなり高くなる見込みです。

<予想される向こう1か月の天候>

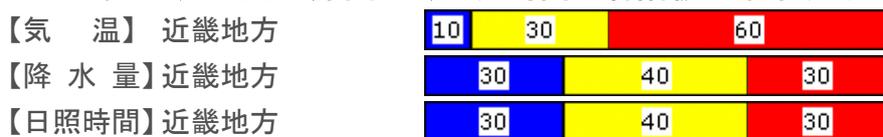
向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

天気は数日の周期で変わり、太平洋側では平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

向こう1か月の平均気温は、高い確率60%です。

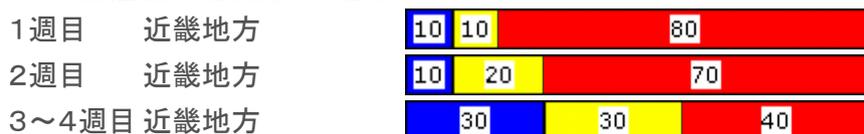
週別の気温は、1週目は、高い確率80%です。2週目は、高い確率70%です。

<向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率(%)>



凡例: ■ 低い(少ない) ■ 平年並 ■ 高い(多い)

<気温経過の各階級の確率(%)>



凡例: ■ 低い ■ 平年並 ■ 高い

<予報の対象期間>

1か月 : 3月10日(土)~ 4月 9日(月)
1週目 : 3月10日(土)~ 3月16日(金)
2週目 : 3月17日(土)~ 3月23日(金)
3~4週目 : 3月24日(土)~ 4月 6日(金)

*発生概況及び防除対策上の留意点

春キャベツ

1【黒腐病】

- (1) 予報の内容 発生量：**平年並**
(2) 予報の根拠

3月上旬の現地調査では発生は認められなかったが、淡路農技場内ほ場でわずかに発生を確認している。今後1か月の気象予報によると、気温は高く、降水量も平年並と予想されており、平年並の発生で推移すると考えられる。

2【菌核病】

- (1) 予報の内容 発生量：**やや多**
(2) 予報の根拠

3月上旬の現地ほ場での発生ほ場率は16.7%（平年値25.3%）と平年並の発生であったが、発病株率は0.5%と平年値（2.2%）に比べて低く、全体的にやや少ない発生であった。

今後1か月の気象予報によると、気温は高く、降水量も平年並と予想されており、本病の発生を助長し、やや多い発生で推移すると考えられる。

(3) 防除上の留意点

発病株は早期に発見し、菌核が形成される前に抜き取ってほ場外に処分する。発病が認められたほ場では2次感染が懸念されるので、薬剤散布を実施する。

防除薬剤については、兵庫県農薬情報システムを参考に選定し、農薬使用基準を遵守し、同一成分を含む薬剤は連用しない。

兵庫県農薬情報システム(<http://www.nouyaku-sys.com/nouyaku/user/top/hyogo>)

3【アブラムシ類】

- (1) 予報の内容 発生量：**やや少**
(2) 予報の根拠

3月上旬の現地調査ではまだ発生は認められていないが、今後春期の気温の上昇に伴い、発生が見られるようになると考えられる。

4【モンシロチョウ】

- (1) 予報の内容 発生量：**やや少**
(2) 予報の根拠

3月上旬の現地調査では成・幼虫ともまだ発生は認められていないが、今後春期の気温の上昇に伴い、発生が見られるようになると考えられる。

タマネギ

1【べと病】

- (1) 予報の内容 発生量：**やや多**
(2) 予報の根拠

3月上旬の淡路地域の現地調査では発生は認められなかった。しかし、本病の常発地調査及び関係機関の調査では早生種を中心に発生を確認している。今後1か月の気象予報によると、気温は高く、降水量も平年並と予想されており、やや

多い発生で推移すると考えられる。

(3) 防除上の留意点

- 1) ほ場の観察に努め、越年罹病株の抜き取りを徹底する。抜き取り株はほ場外に持ち出し、適正に処分する。
- 2) 薬剤防除を行う場合は、散布ムラの無いように十分量の薬剤を散布する。
- 3) 連続して2日以上 of 降雨が予想される場合は、本病の2次伝染が懸念されるので、降雨前に必ず薬剤防除を行う。防除薬剤については、地域の防除暦や兵庫県農薬情報システムを参考に選定し、農薬使用基準を遵守し、同一成分を含む薬剤は連用しない。
兵庫県農薬情報システム (<http://www.nouyaku-sys.com/noyaku/user/top/hyogo>)

2 【白色疫病】

(1) 予報の内容

発生量：やや少

(2) 予報の根拠

3月上旬の淡路地域の現地調査では発生は認められなかった。今後1か月の気象予報によると、気温は高く、降水量も平年並と予想されており、やや少ない発生で推移すると考えられる。

3 【細菌性病害】

(1) 予報の内容

発生量：やや多

(2) 予報の根拠

3月上旬の現地ほ場での発生ほ場率は16.7%（平年値 12.7%）、発病株率は0.1%（平年値 0.1%）と平年並の発生状況であった。今後1か月の気象予報によると、気温は高く、降水量も平年並と予想されており、3月以降の気温の上昇と降雨の増加により発生はやや多くなると予想される。

(3) 防除上の留意点

主に腐敗病と軟腐病が発生し、立毛中のみでなく収穫後の貯蔵中にも発生するので、体系的に薬剤防除を行う。

防除薬剤については、兵庫県農薬情報システムを参考に選定し、農薬使用基準を遵守し、同一成分を含む薬剤は連用しない。

兵庫県農薬情報システム (<http://www.nouyaku-sys.com/noyaku/user/top/hyogo>)

4 【ネギアザミウマ】

(1) 予報の内容

発生量：やや少

(2) 予報の根拠

3月上旬の場内調査ではわずかに発生がみられた。今後春期の気温の上昇に伴い、発生が見られるようになると考えられる。

春レタス

1 【菌核病】

(1) 予報の内容

発生量：やや多

(2) 予報の根拠

3月上旬の現地ほ場調査では発生ほ場率は8.3%（平年値：10.0%）、発病株率は0.3%（平年値 0.2%）と全体的には平年並の発生状況であった。今後1か月の気象予報によると、気温は高く、降水量も平年並と予想されており、やや多い発生で推

移すと考えられる。

(3) 防除上の留意点

発病株は早期に発見し、菌核が形成される前に抜き取ってほ場外に処分する。発病が認められたほ場では2次感染が懸念されるので、薬剤散布を実施する。

防除薬剤については、兵庫県農薬情報システムを参考に選定し、農薬使用基準を遵守し、同一成分を含む薬剤は連用しない。

兵庫県農薬情報システム (<http://www.nouyaku-sys.com/nouyaku/user/top/hyogo>)

2 【灰色かび病】

(1) 予報の内容

発生量：やや多

(2) 予報の根拠

3月上旬の現地ほ場調査では発生ほ場率は33.3%（平年値：28.1%）、発病株率は1.5%（平年値 0.9%）とやや多い発生状況であった。

今後1か月の気象予報によると、気温は高く、降水量も平年並と予想されており、やや多い発生で推移と考えられる。

(3) 防除上の留意点

1) トンネル内の湿度が上がると本病は多発するので、トンネル換気を行う。

2) 発病株は早期に発見し、抜き取ってほ場外に処分する。発病が認められたほ場では、薬剤散布を実施する。防除薬剤については、兵庫県農薬情報システムを参考に選定し、農薬使用基準を遵守し、同一成分を含む薬剤は連用しない。

兵庫県農薬情報システム (<http://www.nouyaku-sys.com/nouyaku/user/top/hyogo>)

3 【ハモグリバエ類】

(1) 予報の内容

発生量：やや少

(2) 予報の根拠

3月上旬の現地ほ場調査で発生は認められなかったが、今後春期の気温の上昇に伴い発生が見られるようになると考えられる。

イチゴ

1 【アブラムシ類】

(1) 予報の内容

発生量：やや少

(2) 予報の根拠

3月上旬の現地調査ではわずかに発生がみられた程度であった。今後春期の気温の上昇に伴い、やや少ないながら発生が見られると考えられる。

2 【ハダニ類】

(1) 予報の内容

発生量：やや多

(2) 予報の根拠

3月上旬の現地調査では平年並の発生であった。今後春期の気温の上昇に伴い、施設内はハダニ類の増殖に好適な環境になり、やや多くなると考えられる。

(3) 防除上の留意点

1) ハダニ類は下位葉の裏に多く寄生するので、薬剤散布を行う場合は薬液が葉裏に十分かかるように丁寧に行う。

2) 防除薬剤については、兵庫県農薬情報システム等を参考に薬剤を選定し、農薬使

用基準を遵守し、同一成分を含む薬剤は連用しない。
兵庫県農薬情報システム(<http://www.nouyaku-sys.com/noyaku/user/top/hyogo>)

その他

【イネ縞葉枯病とヒメトビウンカ】

- (1) 一部地域でイネ縞葉枯病の多発生が続いている。本病はヒメトビウンカが媒介する。水稲収穫後の刈り株やほ場内に発生したイネ科雑草は、ヒメトビウンカの越冬場所として最適なうえ、春期には成長を助長させる。
- (2) 昨年、縞葉枯病の発生を確認した地域や、昨年秋の保毒虫率が高かった地域（平成29年度病害虫発生予察技術情報第1号参照、ホームページに掲載）では、耕耘によって越冬世代虫密度を低減させる。耕耘は越冬世代成虫が出現する4月までに実施することが望ましい。
- (3) 本病の総合的な対策については、イネ縞葉枯病防除マニュアル（ホームページに掲載）を参照にされたい。

* この情報は、兵庫県立農林水産技術総合センターホームページに掲載
(<http://www.nouyaku-sys.com/noyaku/user/top/hyogo>)